

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 計算機媒体 MT 収蔵

何世代前と言っていいか筆者にはよくわからないが、計算機の媒体としてオープンリール（こう表現していいのかもよくは知らない）のMTが使われていた。30年ほど前、ASTRO-Aとして打ち上げられ、「ひのとり」と命名された太陽観測衛星があり、ちょうどその頃、恒星分類部という部署で変光星の観測をやっていた筆者は東京天文台の宇宙開発部門というか、ロケット搭載観測装置、天体観測人工衛星開発をやっていた西教授や田中捷雄助教授のいた研究室に異動した。

異動後、すぐに「ひのとり」衛星の運用で内之浦に出張させられた。その頃、衛星の観測データを記録していたのが写真1のようなオープンリールのMTであった。「ひのとり」の開発の中心が田中捷雄助教授であり、彼はこのデータの入ったMTは永久保存だと言っていた。「ひのとり」の観測データは毎日1本のMTに記録された。従って大量のMTが使われ、瞬く間に倉庫に山のように積まれていったことを覚えている。



写真1 計算機の記憶媒体 MT

永久保存だと言われたそれらのMTの末路は知らないが、このMTはただ保管しておいていつでも読み出せる代物ではないと聞いていた。時々巻き取り、巻き戻しをしないとテープがくっついたり、磁気が転写されて使用不能になると言われていた。またこのMTの書き込み、読み取りの駆動装置は大掛かりなものであったから、新しい小型の記憶媒体が出てきてそんなには長く使われなかったと思う。そしてMTの駆動装置はもはや、特別な所にしか存在せず、MTに収められたデータは読むこともできなくなっているだろう。計算機のこの20~30年間の進歩は目覚ましく、計算機の媒体はどんどん進化していった。筆者がハワイ観測所にいたころ導入されたスーパーコンピュータの記憶容量が150TBと聞いて驚愕したが、今は自分のデスクの上に1TBの記憶媒体がある時代になってしまった。

ロケット、人工衛星搭載用観測装置の開発グループにいたころ、大気球搭載観測装置の開発グループにもいたが、この装置開発をやっていた田中済氏は記録媒体として「DAT(ダ

ット)」というカセット磁気テープを使っていた。

今回のMTは、2010年3月に定年退職したM女史がアーカイブの対象として残してくれたものだが、同時に8mmカセットテープ（写真2、3）も1時台の計算機の媒体として残してくれた。これも計算機の媒体のMTであろう。



写真2 計算機のデータ記憶媒体 8mmMT



写真3 8mmカセットテープ